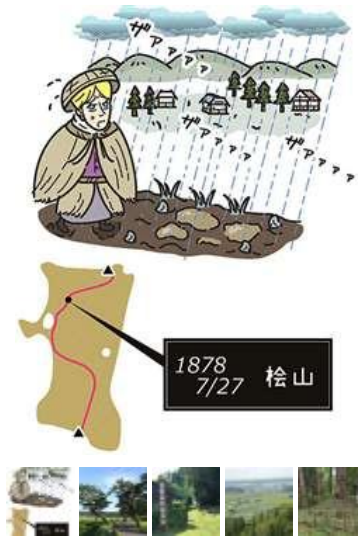


## イザベラ・バード秋田の旅（8） 桧山編

2018年8月26日 掲載



1878（明治11）年7月27日、イザベラ・バードはびしょぬれになりながら羽州街道を歩き続けていた。早朝、豊岡（三種町）を出発したが、前日からの雨が降りやむ気配はない。油紙の雨がっぱは役に立たず、冷たい雨が服に染み込む。

悪天候に加え、道の険しさもバードを苦しめたに違いない。羽州街道において鹿渡（三種町）から豊岡、桧山（能代市）などを通って鶴形（同）に至るルートは険しく、急坂や沢渡り、峠越えもあった。目にするものといえば、霧の中にかすむ低い山々、冠水した水田、ぬかるみと化した道、そして時折現れる集落のみ。だが単調な風景は桧山に入って一変した。



「美しい斜面にある士族の村、桧山だけは例外だった。隣家と間隔をおいて建つその家はいずれも美しく、愛らしい庭や厚い屋根のある門が付き、また背後は一段高くなって草が生え石垣で画されていた」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」より）

桧山は戦国大名の桧山安東氏が桧山城を築いて本拠地とした町。藩政時代には佐竹氏の家臣・多賀谷氏が所預（ところあずかり）として居館を置いた。バードが訪れる約50年前、1831（天保2）年作成の絵図を見ると、桧山中心部の街道沿いには町割に従って、奥行きのある家臣の屋敷や寺院が整然と並んでいる。

「桧山は山を切り開いてつくった。だから斜面にあると表現したのではないか」。のしろ桧山周辺歴史ガイドの会の小杉山久義会長（能代市）が推測する。街道の東には山城の桧山城があった霧山、西には多賀谷氏居館がある茶白山の高台。山と高台に挟まれた街道の路面は現在より低く、沿道の家に入出入りするための階段もあったという。

能代市教育委員会によると、バードが訪れた明治初期も藩政時代の町並みに大きな変化はなかったとみられる。山あいにもかかわらず美しい町並みをつくり上げた桧山に、バードは「洗練された感じ」と「静謐（せいひつ）な暮らしぶり」を見て取った。

桧山の中心部を出て間もなく、立派な松並木が見えてくる。1681（天和元）年、秋田藩が羽州街道沿いに整備したもので、その後も補植された。現在残る松並木の樹齢は推定200年。北上を続けるバードも同じ松を目にしたことだろう。



秋田市以北の羽州街道は後に国道7号となるが、鹿渡—鶴形間だけは昔と今ではルートが大きく異なっている。桧山など内陸を通る道が「峻坂険路」（秋田県史）であることなどを理由に沿岸部の能代回りに変更されたからだ。1890（明治23）年のことだった。国道から外れた内陸ルートには、この松並木をはじめ、往時をしのぶ足跡や風景が今も残っている。